

劇場版 ゼロ・ウーマン R 警視庁 0 課の女 / 欲望の代償

2007(平成19)年4月22日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督=藤原健一/原作=篠原とおる『劇画 警視庁 0 課の女』(リイド社刊) / 出演=三浦敦子/範田紗々/三浦誠己(竹書房、新東宝配給/2007年日本映画/73分)

第3章

ヒロインの個性・職業も千差万別

……篠原とおる原作のエロティック・バイオレンス劇画『0課の女』シリーズは、梶芽衣子主演で大人気を博した『女囚さそり』シリーズの後継シリーズ。杉本美樹、飯島直子に続く三代目「0課の女」は、清純派美女の三浦敦子。政界、官界、財界の要人が次々と殺されていく中、本庁からのエリート刑事、謎の女暗殺者、そして過激派たちが次々と絡んでくるが……？ 適所に配置される計4回の美しいヌードシーン、ベッドシーンと想定内のストーリーを安心して楽しもう。ところで第4作はいつ頃……？

たまには、劇場版〇〇も……

最近では『踊る大捜査線 THE MOVIE』(98年)、『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ』(03年)、『海猿』(04年)、『LIMIT OF LOVE 海猿』(06年)、『アンフェア the movie』(07年)など、テレビの人気番組を映画化したものが増えているし、大人気を博している。それと同じようなもので、東映のVシネマなどの番組を映画化したのが『龍が如く 劇場版』(07年)など。そして、この『0課の女 劇場版』もそんな1本……？

フジテレビ、日本テレビなどの人気番組とタイアップした映画は大ヒットを狙ったメジャー作品であるのに対し、Vシネマを元にした『劇場版〇〇』は、どちらかというとマニアックな観客をターゲットとしたマイナー作品……？

『0課の女』は脈々と続く1つの路線……

私の大学時代、篠原とおるの劇画マンガ『女囚さそり』シリーズが大人気とな

り、その映画化によってもともと清纯派女優としてデビューした梶芽衣子を全く違う役柄で一躍大スターに押し上げた。篠原とおるが描く、この手のエロティック・バイオレンスものを引き継いだのが『ワニ分署』であり、『0課の女』。

ジェームズ・ボンドこと『007』や、ロバート・ヴォーンとデヴィッド・マッカラムのコンビによる『0011ナポレオン・ソロ』が「殺しのライセンス」を持った特別なスパイなら、警視庁の、捜査1課でも2課でもない「0課」とは一体ナニ……？ それは、捜査のためには手段を選ばず、殺人さえもいとわない特命の非合法捜査機関のこと。1970年代の東映バイオレンス映画を代表する1本が、杉本美樹が主演した『0課の女・赤い手錠』（74年）。『女囚さそり』は、房の中においてネチネチと執拗に展開される女同士の同性愛が1つの「売り」だが、『0課の女』の売りは、0課の女刑事が危機に陥った時、必ずその美しい裸身をさらし、犯されたり、リンチを受けたりするところ……？

これは、『007』シリーズにおけるジェームズ・ボンドが必ず1度は危機に陥るものの、あまり派手な拷問を受けることなく次の展開に移るのと好対照……？

『0課の女』シリーズを観に行く観客の大半がそんなシーンを楽しみにしていることを製作サイドもよく知っている(?)から、この映画のチラシには、0課の女レイが下着姿のまま両手をしばられ、つるされている姿が……。

国家公務員の制度改革の行方は……？

現在、渡辺喜美大臣を中心として国家公務員制度改革のための法律づくりが進められている。そのメインは天下り禁止のため、各省庁を超えて一元化した新・人材バンクを設置することだが、エリート公務員たちの抵抗を突破するのが並大抵でないことは当然。国家公務員I種試験を受けてキャリア官僚のコースに進むのは、東大法学部の学生が大半。各省庁に配属された彼らは、最終のポストである「次官」を目指して出世競争を展開し、途中リタイア組は特殊法人に天下りしていくというのが、明治以降脈々と続いてきた日本の国家公務員制度……？

大蔵、通産、運輸、農林、厚生、文部などの各省庁は、昭和の良き時代には良く機能していた(?)が、2001年に中央省庁の再編がなされた後も、その構造は基本的に同じ……？ したがって、今回の国家公務員の制度改革は、小泉内閣に

よる郵政民営化改革以上の国家の一大事……。

こんなひねくれ者は珍しい……

中央省庁に配属されたエリート国家公務員は数年経つと地方回りをさせられるが、それは幹部としての体験を積み徐々にキャリアアップしていくために不可欠なシステム。0課の女レイは名前も戸籍もなく、いつ消されても仕方がないという屈みたいな存在……？ しかし、警視庁捜査一課の早見刑事（三浦誠己）はもともとレイとは全く異質の超エリート刑事で、たまたま今は某警察署に配属されているよう……？ ふつう本庁から警察署に出向してくるキャリア組には現場志向などさらさらなく、管理部門をさらりと経験して本庁へ戻ることを希望しているもの。したがって、署長は早見もいずれそうなるだろうと思っていたが、意外にも早見はある事件に興味を示し、1人でいろいろと動き回ること……。

そんな中、あちらの現場こちらの現場でよく鉢合わせすることになったのが早見とレイ。「0課の女」の話が聞かされ、先輩からもこんな事件に首を突っ込むなどアドバイスされ、またレイからも「これはあんたの事件じゃない、私のヤマだ」と言われたにもかかわらず、なぜか早見はこの事件に執着。一体それはなぜ……？ そして、それはどんな結果を招くことに……？

レイを演ずる三浦敦子は……？

『0課の女・赤い手錠』の杉本美樹、『Zero WOMAN 警視庁0課の女』（95年）の飯島直子に続く三代目の「0課の女」を演じたのは、『下弦の月』（04年）、『鳶がクルリと』（05年）等に出演している三浦敦子。どちらかというところ清純派美女のイメージでテレビドラマやCMで活躍しているが、その半面グラビアでも人気を博しているから、そのプロポーションにはかなりの自信を持っている様子……？ その結果、完全にイメチェンしたうえでの挑戦だが……？

『女囚さそり』シリーズでも、『0課の女』シリーズでも、難しいのはカゲの部分。美人でかわいい女優はゴマンといっても、このカゲの部分をうまく表現できなければエロティック・バイオレンス路線の主演は張れないことは、梶芽衣子を見れば明らか。三浦敦子演ずるレイは、赤いトレンチコート姿に統一したうえ、セ

リフは極度に少なく、かつぶつきらぼうなしゃべり方をして、そのカゲの部分を出そうとしているが、さてその成果は……？ もともと愛くるしく可愛い顔立ちなだけに、多少ムリをしている感じは否定できないが……？

レイを食った感じのユキ……

この映画のメインは0課の女レイだが、もう1人レイと対立する側の人間として謎の女暗殺者ユキ（範田紗々）が登場する。事件は政界、官界、財界の要人が次々と殺されていくという重大なもので、それに治外法権のアメリカ基地が絡んでいることは明らか。他方、日本では今は下火となってしまったが過激派グループは常に存在し、独自の理論に従って行動しているから、ユキもその仲間……？

この映画では、レイの濡れ場シーンが2回、ユキのそれが2回と平等に登場するが、スクリーンに映る2人の美女のヌード姿を拝んでいると、その上半身のキレイさは明らかにユキの方が上。したがって、どちらかを選べと言われたら、私は躊躇なくユキの方を選びそう。そんな意味をこめて、この映画では本来サブのはずのユキが主役のレイを食っている感じ。あなたは、そう思わない……？

ストーリー自体は割とあっさり……？

要人の暗殺、警視總監の娘の誘拐に対する人質として0課の女レイの提供、そしてアメリカ基地が関与した大犯罪のにおい、そんなサスペンス色にエロティックシーンをうまく絡み合わせたストーリーが続いていく。しかし、この手の映画の結末は大体みえているもので、予想を大きく超えた意外性はないのが普通……？ この映画において、早見が果たす役割は、0課の女レイに対する関心の高まりの中で次第に深まっていく彼女への愛だが、それがうまく実を結ぶことはあり得ない。しかして、早見の結末は……？

他方、最近はやりの（？）レイとユキの女同士の対決は、いかなる局面で登場し、いかなる結末に……？ ほぼ想定範囲内のストーリー展開だが、Vシネマの劇場版は、そんな約束ごとがきっちり守られているから、安心して楽しむことができるというもの……。

2007(平成19)年5月1日記

あなたはこう読む？ 公務員法の行方

07年7月22日(日)に予定されていた参議院選挙が29日に延びたのは、安倍晋三総理の強い執念で、公務員制度改革関連法の成立を急いだため。0課の女レイと張り合う現場指向の強い警視庁のエリート刑事は映画の中だけの話で、現実にはエリート公務員として順調に出世することを願い、同期仲間との競争に敗れた場合は、関係する特殊法人への天下りを希望するヤツばかり。6月30日未明に成立した同法は、「天下り天国、役人天国を許さない」と渡辺喜美行政改革担当大臣がくり返したとおり、予算や権限を背景とした官民癒着の構造を打ち破るため、公務員の再就職の斡旋を「官民人材交流センター」に一元化したのが大きな特徴。しかし、「ハローワーク」とは別になぜそんな組織が必要なのかと反論されたうえ、「省庁に必要な協力を求める」という条項が盛り込まれたため、同法が本当に機能し、天下り規制の効用を果たすのか否かは不明瞭だ。法律や政令・省令をいじくり回して、自分たちに不利な条項は骨抜きにし、有利な条項だけを最大限活用していく能力は、官僚たちの方が政治家や国民より1枚も2枚も上。そうだとすると、この改革の行方には暗雲が？

もっとも、公務員制度改革の基本方

向を定める「国家公務員改革基本法(仮称)」の制定は来年の通常国会だから、「関ヶ原の戦い」はまだ先。その焦点は公務員への労働基本権付与の是非。首切りを認める代わりに、昔の国労や動労のように公務員にストライキをやられたのでは大変だから、この議論は難しい。もっとも、参議院選挙の結果、与党が過半数割れとなれば大きく政局が進み、安倍総理による衆議院解散・総選挙の可能性も十分。そうなれば、まともな公務員法案の審議ができるかどうかも不透明だ。人治から法治へ舵を切り替えた中国は今「和階社会」を目指して腐敗した共産党幹部の摘発に必死だが、悪い奴ほどよく眠るのは世の常。そこで注目されるのが、07年7月1日付産経新聞の「正論」。これは「経済人と『儒家』の心」と題して、「法令順守」を金科玉条とし「適法」なら何をしてもオーケーとする法律万能の風潮に警鐘を鳴らしたものの。すなわち、法の対極にあるものとして儒家の精神を掲げ、今こそ法家以上に儒家の尊重、法律より道徳を上位に置くべきと説いたもので、弁護士の私も大賛成。日本の公務員制度改革のためにはこんな考え方も必要では……？

2007(平成19)年7月13日